

聖書:ルカの福音書7章36～50節

説教:安心して行きなさい

はじめに

今回は洗礼者ヨハネが、イエスの所へ使いを送って、「おいでになるはずの方は、あなたですか」と質問したところを見たのですが、そのとき私が語った内容がかえって皆さんの理解を混乱させてしまったことがわかり大変申し訳なく思います。

今日の所には、あるパリサイ人の一人から食事の招待を受けた時のことが書かれています。34節にもあるように、パリサイ人はイエスが罪人一緒に食事をしていることを強く非難しています。そのパリサイ人から食事に招待されるのですから、それだけでも大変なことですが、その食事の場に一人の罪深い女性が現れ、いろいろあった末に「あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい」と語る。いったいこの時何が起きていたのか。ともに見てまいります。

1 パリサイ人がしかけた罠

1節だけを読むと、イエスは何事もなくパリサイ人の家に入って食卓に着いたかのように見えます。しかし、実はそうではなかったことが後で明らかにされます。44節から46節。「この人を見ましたか。わたしがあなたの家に入って来たとき、あなたは足を洗う水をくれなかったが、彼女は涙でわたしの足をぬらし、自分の髪の毛でぬぐってくれました。あなたは口づけしてくれなかったが、彼女は、わたしが入って来たときから、わたしの足に口づけしてやめませんでした。あなたはわたしの頭にオリーブ油を塗ってくれなかったが、彼女は、わたしの足に香油を塗ってくれました。」

イエスは、招待したお客にすべき礼儀を三つ挙げています。「水で足を洗う」「口づけする」「頭にオリーブ油を振る」。これらのことは、いまま中東の社会で行われているそうです。日本では、大事なお客様が来れば玄関から入っていただき、奥座敷に案内し、座布団を出し、お茶を差し上げます。もしそうしなかったら、歓迎されていないしです。イエスは食事に呼ばれながら、皆が見ている前で一人だけ座布団も出されず、お茶も出なかった、ということになる。こうなることをあらかじめ予想できなかったはずはありません。このような扱いをされるだろうということをご存じの上で、はずかしめを受けます。なぜそこまでするの

でしょう。そのことはこれからじょじょに明らかになります。

2 罪深い女

1) 泣きながら

このとき意外なことが起きます。37、38節。「すると見よ。その町に一人の罪深い女がいて、イエスがパリサイ人の家で食卓に着いておられることを知り、香油の入った石膏の壺を持って来た。そしてうしろからイエスの足もとに近寄り、泣きながらイエスの足を涙でぬらし始め、髪の毛でぬぐい、その足に口づけして香油を塗った。」

それを見ていたパリサイ人たちは心の中でつぶやきます。39節。「この人がもし預言者だったら、自分にさわっている女がだれで、どんな女であるか知っているはずだ。この女は罪深いのだから。」

この女性がどうして罪深いと思われていたのか、具体的な事は書かれていません。いずれにしても、罪ある者がほかの人に触れることは、その人を汚れさせることになると考えられていましたから、普通であれば怒鳴って追い返すはず。ところがイエスは触れられるままにされている。「この女がどんな女か見抜けないとは、なんと間抜けな男か。」こんなふうに関心しているパリサイ人は心の中でイエスを蔑んでいきます。

2) 福音を聞いていた

推測になりますが、この女性はどこかでイエスがなさったことや語ったことをどこかで耳にしていたのだらうと思われれます。自分は罪深い人間だけれど、神は貧しい者、飢えている者、泣く者を神の国に迎えて下さるとあの方は語って下さった。それだけでなく実際に、この方は、罪人のと言われていた取税人と一緒に食事をしたとも聞いた。このようなことを語る方に、いつかお目にかかりたいと願っていたとき、イエスがパリサイ人の家に呼ばれたとのうわさを耳にしました。これはチャンスと、香油の入った壺を手にして急いでやって来た。おそらくこのようなことだったのでしょう。

3) なぜこうするのか

さてここで確認しておかなければならないことがひとつあります。この女性はいつからパリサイ人

の家にいたのか、です。イエスが家に入るとき既に家にいたのか。それとも、イエスが食卓に着いた後で家に来たのか。答えは45節です。「あなたは口づけしてくれなかったが、彼女は、わたしが入って来たときから、わたしの足に口づけしてやめませんでした。」

明らかに、イエスが家に着いた時には、既にこの女性は家にいた。どうしてこのことにこだわるのか、理由があります。この女性が既に家にいたということは、イエスが招待されたお客として受けるべきおもてなしを受けられず、恥をかかされているのを見ていたということになる。

なぜこの女性は泣きながらイエスの足を濡らすのか。それだけではなくて、女性のたしなみとして当時頭にあったかぶり物を取り、髪の毛をわざわざほどいて足をぬぐうのか。なぜ香油を足に塗るのか。

最初からこうしようと計画していたのではありません。イエスに感謝の思いを示すために、ちょっとでも香油を塗ることができれば。自分の身分を考えたら、それだけで精一杯と思っていた。ところが、イエスが皆の前で侮辱されていく姿を見たとき、黙っていられなくなった。あまりにもひどい仕打ちを受けるのを見て、後先も考えず、思わず走り寄ってこうした、ということです。

3 イエス

1) 多く赦されている

これを見て人々が心の中でいろいろなことをつぶやきます。そこでイエスはこの家の主人であるシモンに向かってたとえ話をしてから47節でこう話します。「ですから、わたしはあなたに言います。この人は多くの罪を赦されています。彼女は多く愛したのですから。赦されることの少ない者は、愛することも少ないのです。」

ここはこんなふうにも読めてしまいます。「罪を赦していただくためには、神をたくさん愛さなければならないのか。」でも、もしそうであるなら、行いの信仰になってしまいます。イエスが言っているのはそういうことではない。言い換えればこういうことです。「自分がどれほど罪深いかよくわかればわかるほど、その罪を神が赦して下さった恵みが大きいことがわかればわかるほど、神への感謝も大きくなって、いつの間にか神を多く愛するようになる。」赦されたから愛するようになる。

その反対のことをしたのがイエスを家に招いたパリサイ人です。罪の深さを知らないので、赦され

た恵みもわからない。なので、イエスを侮辱しても平気です。

2) どのようにして多く愛するようになったのか
ではこの女性はどのようにして神を愛するようになったのでしょうか。

自分で頑張って神を多く愛さなければと努力したのか。そうではない。イエスは何をしましたか。自分が畏にかけられていることを知りながらパリサイ人の家に向かいました。案の定、非常に侮辱的な扱いを受け、恥をかかされます。でも、イエスが侮辱されたことで何が起きたのでしょうか。この女性は、思わずイエスの足元に駆け寄り、自分が持っているものをすべてを使ってパリサイ人がしなかったことをしていく。涙を流し、髪の毛でぬぐい、自分の口をイエスの足に触れる。このようにし神を愛するようになった。いったいなぜ、この女性はこうするのか。

この女性もイエスと同じことをされてきたからではないですか。他の家を訪ねていっても、お前など座るところはない、お前が来るだけでこの場所が汚れる、そんなふうと言われて追い返される。帰ろうとすると背中からもっとひどいことばで罵声を浴びせられ、ときには石も投げられたかもしれない。自分がされたことを、イエスもされている。黙って見ていられずに駆け寄って行く。

3) イエスがしてくださったこと

そうするとイエスは何をしたことになるのでしょうか。この女性がどれほどの神に愛されているのかがもっとわかるように、この女性の罪がどれほどに赦されているのか、そのことがはっきりわかるように、イエスはあえて屈辱的な扱いを受けられた。はずかしめを受ける姿となって、この女性を待っておられたことになる。

ただ待っておられたわけではありません。女性がイエスに駆け寄ったとき、女性の目に入ったのはイエスの背中と足だけです。ところが44節。「それから彼女の方を向き、シモンに言われた。」このときイエスは女性にご自分の御顔を向けるのです。そして女性が、ご自分に何をしてくれたのかを人々の前で高く評価しながら説明して、こう言われます。「あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。」

この女性のどこに信仰と呼べるものがあつたでしょう。最初は小さなものだったかもしれませんが。しかしいま見たように、イエスがへりくだる姿をとられたことによって、この女性はイエスのふ

ところに飛び込むことができたのですから、イエスがこの女性に信仰を与えてくださったとさえ言える。ところがイエスは言うのです。「あなたの信仰があなたを救ったのです。」そして「安心して行きなさい。」これを直訳すれば、「平安の中へ入りなさい」となる。信仰はあなたがもともと持っていたものです。あなたは平安の中に進んで行きなさい。

これは神が語られたことばです。それは、イエスの単なる希望とか願望ということではありません。必ずこうなるという約束です。もしも、「私に信仰があるのだろうか」と悩む方がいるならば、神はそのような者に、あなたの信仰を何倍にも大きくして強くしてくださると語っているのです。

そして神は約束するのです。あなたはこれから平安の中に進んで行くのだ、と。もちろん今は平安でないかもしれない。けれども、イエスは小さくなって罪深い女性を迎えたのですから、この方は私たちにも同じことをして迎えてくださり、御顔を向けて下さいます。その方が「安心して行きなさい」と言われるのですから、私たちはこのことを信じて歩み出したいと願います。